

## 中國漁村の変貌

—山東・浙江両省調査による比較研究—

田畠久夫\*

### I. 研究視角

特定の国家または民族には、固有の文化が存在する。その固有文化の基盤あるいは根底となっている文化は、一般には基層文化(Basic Culture)<sup>1)</sup>と称される。基層文化は、現実には眼に直接触れることが少ないので、具体的に確認することが困難な場合が多い。しかし、かかる文化は、各々の固有文化の形成を考察するうえからも、非常に重要な概念であるといえる。日本の固有文化を考える場合、基層文化として、照葉樹林文化<sup>2)</sup>と呼ばれている文化が、近年では大変有力な作業仮説(working hypothesis)と看做されている。つまり、照葉樹林文化が、日本固有の伝統文化の形成に多大の影響を与えたと想定されるからである。ここでいう照葉樹林文化の生態学的基盤である照葉樹林とは、一般には常緑広葉樹林と称される森林帯のことである。照葉樹林の分布は、東アジアの温帯に植生が限定され、アラカシ(*Quercus glauca*)を代表とする常緑のカシ類、ツブラシイ(*Castanopsis cuspidata*)、タブノキ(*Machilus thunbergii*)、クス(*Camellia japonica*)などの樹木が代表とされる。この照葉樹林帯という自然地理的条件の下には、非常に多数の民族集団が居住し

ている。彼らは、民族あるいは言語に関して、その所属する系統が異なっている場合も多い<sup>3)</sup>。しかし、例えば、野生種のクズ、ワラビ、マムシグサ類のイモおよび堅果類を調理する前の水晒しなどのアク抜きや渋抜きの技術、茶の葉を加工して飲用するという慣行、鶏飼、麴を使用した発酵酒、漆器、モチ、納豆など多種多岐にわたる文化や生活様式(genre de vie)<sup>4)</sup>には、共通点がみられる。これらの文化複合は、総称として照葉樹林文化と呼ばれているのである。

かような特色を有する照葉樹林文化は、照葉樹林帯に沿って、西端はネパール・ブータンから、東端は江南の地と称されている長江中・下流域から華南にかけて、帯状に広範囲にわたって分布している。そして、その最東端は日本列島の西南部にまで達している。このように、日本列島の西南部は照葉樹林帯に所属しているのであるが、照葉樹林文化の中心である大陸<sup>5)</sup>とは、氷河時代などの歴史的に古い時代を除外するとしても、東シナ海などの海洋によって隔離されている。したがって、前述した照葉樹林文化の代表とされる文化要素の多くは、日本列島西南部で単独で発生しなかったと考えられる以上、大陸から渡来してきたと推測せざるを得ない。かかる点は、現在の日本人の主食である米についても

\* 昭和女子大学

同様である。しかしながら、個々の文化要素はひとりで渡来するのではなく、日本列島西南部に渡来するためには、それらの文化要素の担い手である民族集団の来島が必要となる。しかも、海を渡るため、日本列島西南部に来島した人々は、船を所有するかまたは航海する技術をもっている漁民かあるいは漁民を含んだ民族集団である可能性が非常に高い<sup>6)</sup>。このような点を総合すると、山東・浙江両省に居住する漁民は、日本列島西南部に大変近いという位置上の優利性に加えて、沖合いを日本海流が北上し、日本列島沖にまで達していることなどの好条件も整っている。それ故、本稿では、彼らの生活の変貌を時系列的に分析する作業を通じて、日本の基層文化の解明の手がかりとしたい。

なお、山東省の沿岸部を占める山東半島は厳密な意味からいえば、照葉樹林帯に属しているとはいがたい。しかし、江南の地から海岸線に沿って北上し、山東半島経由日本列島（九州島）へという文化伝播コースも短距離であるなどから想定可能<sup>7)</sup>なことや、さらに、山東・浙江両省の漁民は、現在でも互いに交流のある点などから、考察の対象とした。また、中国の海洋漁民は、鵜飼などを主体とする河川漁民とは異なり、集落を形成し、そこを生活の基盤として操業活動に従事していくので、漁村を主要研究対象とした。

## II. 漁村の類型 ——日本と中国との比較——

漁村の類型を論じる前提として、漁村を形成する中心的な構成要素である漁民を検討してみよう。というのは、漁民をどのように把握するかによって、漁村自体の性格が多少異なると推察されるからである。漁民とは、専門的に魚介類を捕獲することを生業としている人々を総称し、主として農業に従事する農民や、木材加工などの林産物によって生計を立てている山地に住む集団と比較対照される概念である。また漁民は、ある特定の漁場の資源（魚介類）が枯渇すれば、他の漁場を求めて移動するという〈移動性〉を元来もっていたことを生業上の特色としている<sup>8)</sup>。このような性格を有する漁民が集団で居住している生活空間が漁村と称されている集落で、一般には集村という形態をとる。なお、海岸沿いに立地している集落でも、その眼前の海域で自由に魚介類を捕獲することができないムラ<sup>9)</sup>が、日本や中国には多いという事実も指摘しておきたい<sup>10)</sup>。

以上論じたような特徴をもつ漁村は、立地条件、社会構造、流通形態などどれ1つをとりあげてみても、複雑多岐な態様を示している。したがって、その定義は困難をきわめることになる。本稿では、「漁村とは、その生産形態は漁撈中心であり、村民がそれに何らかの関連を有する社会集団（social group）であり、漁業協同組合<sup>11)</sup>もしくはそれに類似する組織をもつ集団である」<sup>12)</sup>と規定しておく。このように定義される漁村は、各種の指標を用いることによって分類することが可能である。日本の場合、魚介類を捕獲する一方において、農業にも従事している集落が多いという点に着目して、主として生業形態を中心的に類型化を行なうと、次のように区分できる<sup>13)</sup>。

純漁村。漁業のみによって生計を立てているムラ。このような形態をとる漁村は、漁業

以外の生産活動が強力な自然的制約を受ける地域や、潜水漁業などの特殊な漁業技術や技能体系によって漁業を行なっている漁民集団からなる場合が多い。

主農従漁村。農閉期などに沿岸部で漁業を副次的に実施しているムラで、生業の中心は農業である。また、住民の意識としても漁民というよりも農民と感じていることが多い。

半農半漁村。理論的には、漁業収入と農業収入がほぼ均衡しているムラである。しかし、日本の場合、このように収入が均衡している集落はほとんど存在しない。したがって一般には、家族のうち男性が魚撈に従事し、女性がその販売や農業を行なっているムラをいう。近年では、民宿を兼業としている事例もみられる。

主漁従農村。収入の大半を漁業に依存しているムラである。第2次世界大戦前までは強力な少数の網元によって支配されていた場合が多くかった。近年では、漁業の資本主義化が進展している集落である。

養殖漁村。対象物を捕獲するのではなく、養殖によって生計を維持しているムラである。200カイリ経済水域の決定後、この形態の集落は増加する傾向がみられる。

このような日本の漁村類型に対して、中国の場合、主として経営主体の規模<sup>14)</sup>により区分すれば次のようになる<sup>15)</sup>。

個人経営。沿岸漁業が中心で、1980年以降顕著にみられるようになった。数人の漁民が共同で小型漁船を所有して操業する場合が多い。鵜飼などの河川漁業にもみられる。

単一の漁業村による経営（漁業生産隊を形成）。集落内に1つの漁業生産隊が存在し、そこを中心に操業を実施している漁村。沿岸

漁業が主体で小規模である。

複数の集落からなる漁業村による経営（漁業生産大隊を形成）。複数のムラによって構成されるので規模は大きいが、基本的には漁業生産隊と同様に運営される。漁場は近海を中心である。

漁業郷による経営（公社・公司を形成）。

漁村が数カ所集合して成立したのが漁郷である。その漁業郷による経営が主体となっている<sup>16)</sup>が、一部には市による経営もみられる。漁民を郷内から募集して実施する会社形式による漁業体である。日本などの外国との合資会社もみられる。漁場は、一部遠洋漁場を含む近海漁場を中心となっている。

なお、近年、実質的には経営規模が漁業生産隊・漁業生産大隊であるのに、名目上漁業公司と称している漁業体も存在する。

以上の日中漁村の類型を比較してみると、日本でいう漁村は、中国の区分では漁業生産隊・漁業生産大隊に該当するものと思われる。

### III. 中国水産業の歴史と主要漁場

中国は、1987年統計では世界第3位の漁獲量を誇る水産大国である<sup>17)</sup>。しかも、最近10カ年間の漁獲量の伸び率は、上位を占める日本・ソ連とは対照的に著しく、2倍以上にも達している。このように、中国の水産業は近年非常に発達してきた。しかし、その歴史に関しては解明されていない部分が多い。かかる最大の理由は、この方面における研究者の不足が指摘できるが、中国人研究者による詳細な漁業史を含む水産史の出現が待たれるのである。このような状況があるので、本稿では、中国最大の漁場となっている浙江省舟山

諸島（中国では舟山群島と呼ばれている）の漁業を中心とする水産業の歴史を検討することで、中国の水産業の歴史の一般的な動向を把握していくこととする。

とはいいうものの、舟山諸島は、1840年代当初に勃発したアヘン戦争のとき、一時イギリス軍により占領され、島民の大部分が大陸に移動するという状態であった。この大混乱のため、現在では諸島内にはほとんど史料がない。したがって、史料的には多くの制約が認められるが、中国側の研究者による研究書<sup>18)</sup>がすでに存在する。以下では、これらの研究書を参考にしながら、筆者の現地における聞き取りなどの知見をも加えて、舟山諸島の漁業史を中心とする水産業の歴史を概観してみよう<sup>19)</sup>。

魚介類採取期、考古学的発掘調査の結果、紀元前4000年頃に舟山諸島の主要な島嶼には、人々が定住し、魚介類を採取していたことが判明している。当時の住民は、主として沿岸沿いに居住し、共同で使用する漁場（日本でいう磯場）を共有していたようである。また、ごく初步的な網や竹製の築などが使用されたらしい。この期間は大変長く、数千年間に及んだと推定されている。

沿岸漁業期。7世紀頃より、海岸沿いの採取中心から、沿岸でのごく小型の漁船による操業が実施されるようになった。とりわけ、738年に舟山県が成立すると、諸島の秩序が安定したため、飛躍的に漁獲量が増大した。この期の主要な漁獲物は、大黄魚 (*Pseudosciaena crocea*)・小黄魚 (*Pseudosciaena polysticta*)・帶魚 (*Trichiurus haumela*) などであった。

操業禁止期。前期にみられた操業も、明代

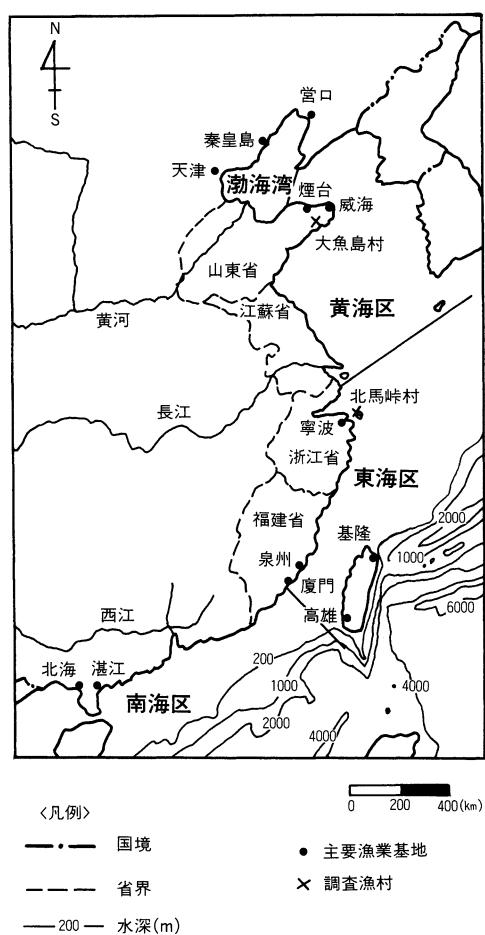
およびその後の清代初期には、主として海賊の取締りなどから、国策として舟山漁場での操業は一切禁止された。

沿岸漁業復興期。1648年の出漁禁止解除後、舟山諸島への入植も許可されることになり、漁業も再開された。その後操業は順調に実施され、1830年頃がこの期の全盛期となり、隣接した福建省の漁船なども多数来島するようになった。しかし、上述したアヘン戦争によって操業は一時遮断されることになる。

沖合漁業期。1850年に入ると、アヘン戦争の後遺症が一段落した。すると漁業も活発に実施されるようになり、漁場も舟山諸島沖合が主体となった。例えば、1935年には底引き漁船、イカ網漁船、流網漁船など総計2530艘の漁船が操業するなど、非常に繁栄していた。この期間は、日中戦争勃発期まで継続した。

木造機帆漁船による操業期。共和国成立後の1956年に機帆船の造船が開始され、1967年には舟山諸島の漁船はすべてこの型式になるなど、漁船の動力化がみられた。その結果、漁獲量も大きく増加することになった。1963年には舟山海洋漁業公司（国営）が、1979年には舟山市第2海洋漁業公司（日本との合資）が設置されるなど、近代的な操業システムで漁獲が実施されることになった。また、漁場も遠洋まで拡大した。なお、近年には、対蝦 (*Psnaeus orientalis*) などの養殖業や、鋼鉄製漁船（冷凍設備内臓）の建造も進められており、日本など外国への水産物の輸出も開始されている。

以上論じたような発展史に代表される歴史を有する中国の水産業の主要漁場を次に検討してみよう。中国では、水産業<sup>20)</sup>は黄海および東シナ海に面している浙江・山東・福建



第1図 中国の漁区

・江蘇の4省に集中し、この4省だけでも全国の総漁獲量の半数近くを占めている<sup>21)</sup>。このような特色をもつ中国の漁場は、一般には北から南にかけて4漁場に区分されている<sup>22)</sup>（第1図）。

渤海区は、渤海湾を中心とする漁場である。そのため大陸から流入する遼河・黄河などの大河川の影響を年中受けることになるが、これらの大河川の河口付近が最大の好漁場となっている。主要漁獲物としては各種の魚類の他、とくに対蝦の漁獲が多い。

黄海区は、山東半島から長江河口までの海域で、海底は、平坦地となっているために底引き漁には最適となっている。帶魚・鮎魚（Pneumatophorus japonicus）などの漁獲量が多いが、かつては沖合で捕鯨業も実施された。

東海区は、舟山諸島・台湾海峡を中心とする中国最大の漁場である。この海域には、長江や錢塘江などの主要河川が流入し、水質はすこぶる良好である。また、暖・寒流の合流点になっているので水産資源も多く、大黄魚・小黄魚などの高級魚の漁獲も多い。

南海区は、台湾より南方の海域で、冬季でも摂氏20度を越える漁場が多い。黃鯛（Taius tumifrons）などの亜熱帯性の魚類を中心に、海亀（Chelonia mydas）・梅花参（Thelephora ananas）などのナマコ類も豊富である。

#### IV. 山東半島先端の漁村

山東半島先端は、黄海区最大の漁場である。典型的な漁村の事例として、榮成市石島鎮大魚島村をとりあげる<sup>23)</sup>。村には大魚島漁業公司が設立されている。本稿の類型に従えば、既に指摘したように漁業公司という名称で呼ばれているが、第2類型の漁業生産隊に該当する。村の戸数は2104戸、人口は6100人である。産業としては、穀物が栽培できる耕地がまったくないため<sup>24)</sup>、漁業および水産関連産業が主体となっている（第1表）。したがって、他の山東半島の漁村で度々みられるのであるが、漁業公司の責任者が村長を兼任することになる<sup>25)</sup>。

大魚島村の成立は比較的新しく、150年前までは村が存在しなかったといわれている。

第1表 大魚島漁業公司関連事業

系 統	工場などの名称	従業員(人)
海 上	遠洋漁業分公司 <sup>1)</sup>	430
	近洋漁業分公司 <sup>1)</sup>	266
	小船隊 <sup>2)</sup>	124
	養殖分公司 <sup>3)</sup>	280
加 工	海外向け冷蔵加工工場	120
	国内向け加工第1工場 <sup>4)</sup>	100
	国内向け加工第2工場 <sup>5)</sup>	150
	乾物加工工場	140
	缶詰工場	150
	魚粉工場	50
工 業	造船・修理工場	230
	漁具工場	300
	塗装工場	70
	電器工場	120
	作業服関係工場	60
副 業	基本建設隊(土木関係)	75
	運輸業	20
	果樹栽培	23
	ミンク養殖業	50
商 業	旅館・商店・飯店など	65 <sup>6)</sup>
計		2,823

1) 一隊・二隊に分かれる。

2) 多綱具分公司ともいう。

3) 海帶(コンブ)・扇貝(ホタテ貝)養殖に分かれる。

4) 600トンの貯蔵才能の冷凍倉庫所有。

5) 1000トンの貯蔵才能の冷凍倉庫所有。

6) その他、理髪師などに80人が従事している。

[出所] 現地での聞き取りにより作成

それ故、大魚島独自の伝統的な漁業形態と想定できるものは多くはない。しかし、古老などの話から、漁業公司成立以前の漁業形態は復原可能である(第2図)。

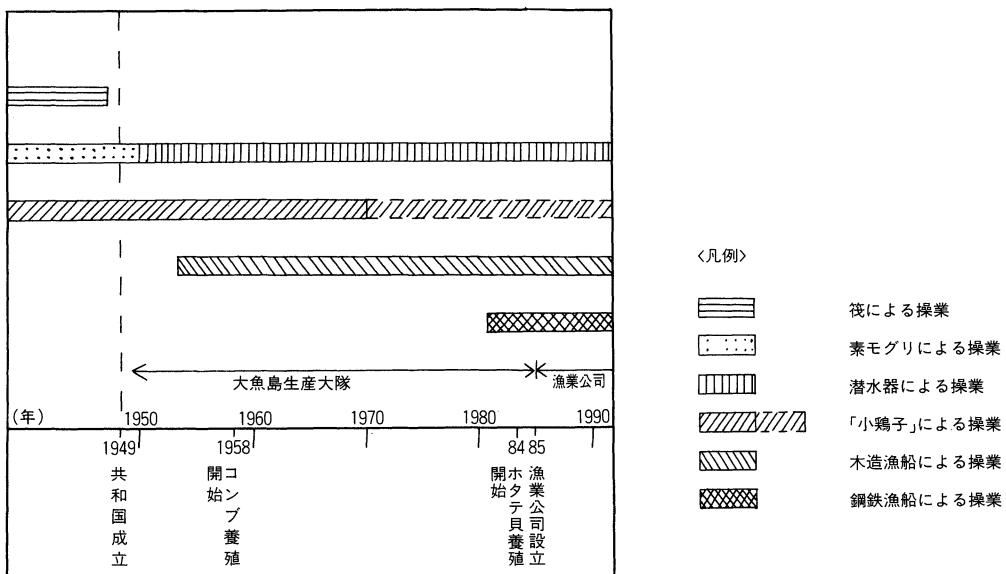
第2図にみられる筏による漁法とは、古くから現地で実施されていた漁法の一種である。筏の材料は福建省などに産する竹を使用したもので、主として貝類を捕獲する目的の潜水漁業に用いられた。また大魚島村では、伝統

的な小型木造漁船は、船体が「ひよこ」に類似しているため「小鶴子」と呼ばれた。この漁船による操業は、沿岸一帯に限定されたが、漁民は朝食をすませてから出港し、午後5時頃には必ず帰港した。かかる理由は、漁民の間では夜半になると「鬼」が出没すると信じられており、太陽が沈む前に港に戻る必要があったからである。伝統的漁法としては、現地で「放小網」と称される魚網の両端に小さな錯が付いている流網が代表的であった。なお、「小鶴子」には、航海の安全祈願や、魚群の発見のために、「龍眼」と呼ばれる船の眼が船首両側に付けられていた。

1950年代以降になると、素モグリに代って、船上の酸素ボンベから直接酸素を送り込む潜水器の使用が開始された。この潜水器の使用により操業時間や潜水深度が大変拡大したため、漁獲量も大きく増加した。しかし、現在では資源の枯渇を防止するため、潜水器での操業は7月15日から10月末日までと制限されている。

1985年には、人民公社の管理下に置かれていた大魚島漁業生産大隊に代わり、大魚島漁業公司が設立された。この漁業公司は、2890名の従業員を擁しているが、一部の漁業関連の技術者を除き、従業員の大部分は村民である。とりわけ、「漁民戸口」<sup>26)</sup>を有する住民は全員公司に勤務し、漁獲に従事するという中心的な役割を担っている。1989年度の総魚獲量は養殖2000トンを含めて、約130,000トンであった。次に、公司の中核を占める遠洋漁業隊、近洋漁業隊、小船隊という各漁業生産組織を検討することで、経営形態を解明していこう(第2表)。

遠洋漁業隊は、135・165・600馬力と各々



第2図 主要漁業形態の変遷

〔出所〕現地での聞き取りにより作図

異なる馬力の木造および鋼鉄製の漁船を所有し、総計430名が所属している。漁場は、浙江省舟山諸島東部沖合の公海上<sup>27)</sup>で、1回の操業期間は約1週間である。漁法としては、冬季の施網が中心で、老板魚 (*Raja porsa*)・墨魚 (*Sepia essculenta*)などの魚類や対蝦など

のエビ類が多く捕獲される。春・秋季には罔

網が実施され、鮎魚・青魚 (*Clupea pullasi*)などが豊富にとれる。なお、7・8月は資源保護のため禁漁期となっている。

近洋漁業隊は、小型木造漁船ばかり50艘所有している。所属している漁船は、伝統的な漁船である「小鶏子」と同型のものもなお活躍しているが、1970年に「小鶏子」にエンジ

第2表 各漁業隊に所属する漁船

漁業隊	馬力	隻数 (隻)	乗務員 (人)	船体	造船所	進水年度 (年)	年間平均収入 (1人当たり)(元)
遠洋	135	2 (1組)	21 <sup>1)</sup>	木造	大魚島漁業公司	1980	18,000
	185	22 (11組)	27 <sup>1)</sup>	鋼鉄	山東黃海造船廠	1981年以降	
	600	2 (1組)	43 <sup>1)</sup>	鋼鉄	榮成市第一造船廠	1988	
	600 <sup>2)</sup>	2 (1組)	49 <sup>1)</sup>	鋼鉄	山東黃海造船廠	1990	
近洋	12~50	50	10人前後	木造	大魚島漁業公司	1950年代	8,000
小船隊	50	18	10数人	木造	大魚島漁業公司	1970年代	10,000

<sup>1)</sup> 1組当りの員数<sup>2)</sup> 冷凍設備をもつ

〔出所〕現地での聞き取りにより作成

ンが取り付けられ、帆船が機械化されるなどして改良が加えられた。漁場は、日帰りが基本である。主要漁法としては、潮流の干満差を別用する竹竿網と称している定置網および流網である。前者は、海岸線近くに設置し、小エビや海蟇 (*Phopilema essulenta*) を捕獲している。後者では鮓魚 (*Scombermorus niphonius*)・鰯魚 (*Ilisha elongata*) の漁獲が主体となる。

小船隊は、木造機帆船18艘を所有している。1回の操業期間は長いときには1カ月近くかかる。それ故、遠洋漁業隊よりもむしろ長期間出漁することになるが、操業形態としては遠洋漁業隊と類似している。また、漁法としては流網が中心であり、この点では逆に近洋漁業隊と似ているといわれている。このように、小船隊は遠・近の両漁業隊の中間型ということができる。したがって、漁場・漁期などは競合することが多い。かかる点は、前二者の漁法が従来からの伝統的な遠洋・近洋漁業を継承しているのに対して、小船隊はその成立が新しく、主として漁船・漁網の近代化的結果生じたためと思われる。漁獲物は鮓魚などが中心であるが、対蝦をはじめとするエビ類の捕獲も盛んである。

以上が大魚島漁業公司の漁業を主体とした概要であるが、村民の多くはこの公司に勤務している。その他の住民を、例えば対蝦の皮むきに代表される水産加工などのアルバイトに従事し、公司と関連をもつ者が多い。

## V. 舟山諸島の漁村

事例として舟山市北嶼郷北馬峙村漁業生産隊<sup>28)</sup>をとりあげる。生産隊がある北馬峙村

は、舟山諸島最大の島である舟山島北東端に位置する。前項の大魚島漁業公司と同様、漁村の類型からいえば第2類型に該当する<sup>29)</sup>。

北馬峙村は戸数280戸、人口は970人である。住民の大半は、村の基幹産業である漁業生産隊に関連しているが、かつてはほとんどの住民が製塩業に従事するという典型的な塩田村であった。その伝統を継承して、現在でも漁業生産隊が888畝の塩田を所有しており、約100名の村民が塩田で働いている<sup>30)</sup>。

漁業生産隊の最大の業務は魚介類の捕獲である。生産隊では、50・45・30の各トンの木造機帆船を所有している<sup>31)</sup>。漁獲物は、現地で滑皮蝦・糙皮蝦と称されている体長6~7センチメートルの小エビ類に限定される。1回の操業に要する期間は通常5日間で、3・4月を中心年中行なわれる。漁獲には施網が使用される。この漁法では、船尾から引く網の上部に浮き、下部には錘を付け、網の深度を調節するのが特色となっている。1987年の漁獲量は3800担(100斤、50キログラム)であった。漁獲された小エビ類は、良質のものは1斤当たり1.5~2.5元で舟山市の冷凍工場などに売却されたり、上海市などの大消費地に直接運ばれて販売される。漁船1艘当たりの年間収入は、年度に多少の差が認められるが、約10,000元ぐらいであるという。主要漁場は、北は舟山諸島の最北端に位置する嵊山島沖合から、南は北緯28度付近の台州列島までの大陸沿いの南北に細長い広範囲にわたる海域である。

さらに、北馬峙村漁業生産隊の漁業形態として特筆すべきものとしては、16トン・7トン・2トンの3艘の漁船の存在である<sup>32)</sup>。これらの漁船のうち、16トンの漁船は1回の操

業期間が1～2週間で、イカ類や梅童魚(*Collichthys lucidus*)を主として捕獲している。一方、より小型の7トン・2トンの漁船は、鰯魚などの大衆魚を中心に漁獲し、漁場も村の沖合に限定されている。このような個人船によって漁獲された魚は、漁業生産隊とは直接関係なく、自由に高価に販売できる市場へと運搬され、そこで取引きされる。

以上の漁撈に対して、生産隊では、1981年より対蝦の養殖を開始している。養殖池は、元来塩田用に海水を一時貯水する蓄水池の一部を転用している。面積は30畝である。養殖用の対蝦の餌は、捕獲した小エビを粉末にしたもの、冷凍魚、配合飼料などを組み合わせて与えている。しかし、小エビの漁獲が少ない年度は、その配合飼料が多く必要となるので、1986年度のように年間の収支が赤字となり、採算が合わないこともある。通常では、養殖池1畝当たり200～250斤の漁獲があり、年間1,000元ぐらいの収入となっている。

なお、これ以外に塩田による収入も貴重なものとなっている。製塩は、伝統的な「灘曬」と呼ばれている入り浜式塩田である。製塩過程は、蓄水池に一時貯水していた海水を塩田に導き入れる「拿潮」、塩田で1週間ほど天日に干す「制歯」、塩をかためる「結晶」の3工程に分かれる。漁業生産隊の塩田では、海水の浸透を防ぐとともに、蒸発を促進するようにビニールを敷く点と、塩田の海水を攪拌するために動力を利用していることが、従来とは異なり近代化されている。作業は塩田12畝を1人が専従で行ない、1畝の塩田から年間3～5トンの製塩が生産可能である。この塩田では普通塩のみ生産し、トン当たり100元で舟山塩業公司に販売している。した

がって、塩田に従事する労働者の年間1人当たりの収入は2,000元ぐらいになる。

近年北馬峙村では人口増加に伴い、漁業生産隊のみでは労働力を吸収しきれないで、主として製塩を運搬する運送業、余剰女子労働力を活用する紡績工場、養豚場などの産業が開始されている。

## V. 結語

山東・浙江両省の海岸地帯は、日本の基層文化を類推するうえからも非常に重要な地域であるという観点から、主としてそこは居住する漁民や、漁民が主要な構成員である漁村に関して、分析を加えてきた。これらの地域は、例えれば遣隋使、遣唐使の上陸地点などとして、互いに密接な関係をもち交流を続けてきた。とりわけ、山東・浙江両省の海岸地帯は、中国文化の玄関口とでも言うべき性格を有してきた。本稿で展開したこれらの地域の漁民は、本文中でも指摘したように、大陸からの文化の伝播に多大の関係をもつと推定される集団である。国家体制をはじめとする種々の制約から充分な現地調査は実施できなかつたが、今後とも多数の漁村の調査を行なうことで、とくに漁民の伝統文化に関する資料を収集したく考えている。そして、その作業を通して、日・中の伝統文化の実態を具体的に把握し、わが国の基層文化の解明の手がかりとしたいと思っている。

〔付記〕本稿の骨子は、1992年1月10日～13日に、中華人民共和国浙江省杭州市西子賓館で開催された「1992年中国伝統文化與中外文化關係國際學術研討会」(主催、中国教育國際交流協會・杭州大学)において、「中国漁村の变迁——根据山東、浙江両省調査的比較研究——」という題目で研究発表した。一般に中国の学会

発表では、研究発表者は、研究発表の要旨とは別に、それに關する論文の提出が義務づけられている。本稿は、そのとき提出した論文（中国語）の日本語の原文を一部修正し、図・表を付加したものである。周知のように、中国の学会においては、詳細な個々の具体的な研究発表よりも、既発表の研究成果を概説的・総括的に整理して発表することが慣例となっている。したがって、本稿は、オリジナルな研究が主体ではあるが、筆者の中国漁村の変貌に関する研究の中間的な総括という性格も兼ねている。具体的な事例に基づく詳細な分析は稿を改めて展開したく考えている。

なお、今回の発表に関しては、山東大学教授兼杭州大学客員教授金中先生に多大の御世話をうけた。深く感謝したい。

### 注

- 1) 基層文化とは、現在の文化には表面上はみられないが、かつて存在したと看做される文化をいう。具体的には、本稿では、日本における稻作文化以前に存在したと推定される文化を基層文化と考えている。
- 2) 照葉樹林文化および照葉樹林文化論に関する著作は多数存在するが、次の著作が代表的である。

上山春平編『照葉樹林文化—日本文化の深層—』（中公新書）、中央公論社、1969、208頁。

上山春平・佐々木高明・中尾佐助『続照葉樹林文化—アジア文化の源流—』（中公新書）、中央公論社、1976、238頁。

佐々木高明『稻作以前（NHK ブックス）』、日本放送出版協会、1971、318頁。

佐々木高明『照葉樹林文化への道 ブータン・雲南から日本へ（NHK ブックス）』、日本放送出版協会、1983、253頁。

上山春平・渡部忠世編『稻作文化 照葉樹林文化の展開』（中公新書）、中央公論社、1985、230頁など。

この点に関して、筆者にも以下の拙論がある。

田畠久夫「照葉樹林文化論と雲貴高原東部の少数民族の生業形態」、兵庫地理35、1990、43～58頁。

田畠久夫「照葉樹林文化論の背景とその展開(1)」、兵庫地理36、1991、22～35頁。

田畠久夫「照葉樹林文化論の背景とその展開(2)」、兵庫地理37、1992、28～42頁。

なお、照葉樹林文化あるいは照葉樹林文化論という作業仮説に対しては、その妥当性をめぐって「民族学研究」誌上において、以下のような議論が展開された。

石井 淳「照葉樹林文化」、民族学研究49-3、1984、273～280頁。

渡辺 誠「照葉樹林文化論と縄文文化研究」、民族学研究49-3、1984、281～283頁。

中尾佐助「照葉樹林文化をめぐって コメント(1)」、民族学研究49-4、1985、394～396頁。

佐々木高明「照葉樹林文化論批判に応えてコメント(2)」、民族学研究49-4、1985、396～399頁。

3) 例えば、同じ照葉樹林帯に属する雲貴高原には漢・チベット語族に所属するミャオ族・トン族などの少数民族が居住しているが、日本列島にはウラル・アルタイ語族に属する日本人が住んでいる。

4) 生活様式は定義することが大変困難な地理学の主要概念の一つであるので、本稿では、地理学におけるフランス学派の祖である Paul Vidal de la Blache の考え方に基づく、松田 信の「生活様式は人類集団が自然的所与を利用して作り出した体系的な社会の型である」という定義に従っておく。

松田 信「地理学的概念」、（野間三郎編『新訂 地理学の歴史と方法（人文地理ゼミナール）』、大明堂、1970、所収）、209頁。

なお、Paul Vidal de la Blache の主張する生活様式に関しては、以下の著書に詳しい。

野澤秀樹『ヴィダル＝ド＝ラ＝ブーシュ研究』、地人書房、1988、37～60頁。

また、生活様式に関しては、次の論文が参考になる。

松田 信「フランス人文地理学派における生活様式の概念の発展」、三重大学学芸学部紀要14、1954、23～49頁。

谷岡武雄「フランス学派における生活様式の概念」、立命館文学112、1955、1～24頁。

松田 信「生活様式論再考」、人文地理17-2、1965、113～133頁。

末尾至行他「ジョルジュにみる生活様式論」、人文地理15-1、1963、88～91頁など。

5) 照葉樹林帯の核心部分は、中国雲南省を中心に、西はアッサムから東は湖南省に及ぶ地域で「東亞半月弧」と称されている。

上山春平・佐々木高明・中尾佐助、前掲2)、6頁に初見。

6) 例えば、民族学者岡 正雄の想定する日本文化を構成したと考えられる種族文化複合のうち、男性的・年齢階梯的・水稻栽培—漁撈民文化と呼ばれている種族文化複合が該当するものと思われる。

岡 正雄『異人その他 日本=文化の源流と日本国家の形成』、言叢社、1979、18～36頁。

なお筆者も、岡 正雄のかかる学説に関して、

- 次の拙論の中で言及した。
- 田畠久夫（1991）、前掲2）、25～29頁。
- 7) このコースは佐々木高明が想定した、照葉樹林文化の要素の1つとされる稻作の日本への3つの伝播経路のうち（A）コースにはば該当する。佐々木の主張する（A）コース説とは、長江中・下流地域（江南の地）から東シナ海を横断し、朝鮮半島南部經由北九州に到達するというものである。
- なお、この佐々木説とは、江南の地から海岸線上にまず北上するが山島半島までは達せず海上を横断するという点と、途中で朝鮮半島南部を經由するという点の2点が本稿でいう伝播コースとは異なっている。
- 佐々木高明『東・南アジア農耕論—焼畑と稻作』、弘文堂、1989、460～471頁。
- 8)かかる点は、木地屋・マタギ・焼畑經營などに從事する山地に住む集団の場合も同様に認められる。この点に関しては、以下の拙論などでも指摘した。
- 田畠久夫・金丸良子「山村研究の一視角」、民俗と歴史20、1988、43～59頁。
- 9)ここでいうムラとは、日本の農村社会学などで主張されている集落のことで、數カ所の自然村が集合した行政村とは明確に区別される概念である。中国では、「組」とか「寨」と称される概念に等しい。なお、自然村に関しては以下の著書に詳しい。
- 鈴木榮太郎『鈴木榮太郎著作集Ⅰ・Ⅱ 日本農村社会学原理（上）・（下）』、未来社、1968、（上）35～88頁。
- 10)魚介類を捕獲する権利は、日本では地先権と称される。この権利を所有することが漁村の前提となる。
- 11)中国でいう漁業生産隊、漁業公司などが機能的には類似している。
- 12)田畠久夫「わが国における海土集落の変貌—五島列島宇久島平を事例として—」、歴史地理学紀要24、1982、70頁。なお、この定義以外に、漁村には、漁業が行なえる諸設備（港湾など）が整備されていなければならないし、村民も漁民であるという意識がなければならない。
- 13)田畠久夫「漁村研究の動向」、民俗と歴史21、1989、10～14頁参照。
- 14)中国の漁村は、日本の漁村とは国家体制の相違などから、水産業全般にわたっての操業・流通などのシステムが著しく異なっている。それ故、本稿では、生業形態による分類ではなく、經營体の規模による分類を行なった。
- 15)田畠久夫・金丸良子「中国舟山諸島の漁村—現地調査による比較研究—」、民俗と歴史23、1991・B、14～15頁を一部修正。
- 16)いわゆる郷鎮企業と称されている經營形態である。
- 17)1987年には934.6万トンの漁獲があり、世界の約10.1パーセントを占めていた（FAO水産年鑑1987年版による）。
- 18)張震東・楊金森編『中国海洋漁業簡史』、海洋出版、1983、430頁。
- 『舟山漁志』編写組編『舟山漁志』、海洋出版、1989、428頁など。
- 19)前掲15)田畠久夫・金丸良子（1991・B）4～6頁。
- 20)淡水での養殖を含む淡水産の漁獲量は総漁獲量の約41.5パーセントを占める。この点が中国の水産業の特色となっているが、本稿では淡水産の漁業に関しては省略した（中華人民共和国農牧漁業部編『中国農牧魚統計資料』、農業出版社、1986、127頁による）。
- 21)総漁獲量（1985年、淡水漁獲量も含む）705万トンのうち、浙江省（14.9パーセント）・山東省（11.5パーセント）・福建省（10.8パーセント）・江蘇省（9.6パーセント）で、これら上位4省で全体の60パーセント近くを占める（前掲20）による）。
- 22)以下の区分は次の書物を参照した。
- 張震東・楊金森編、前掲18)、2～5頁。
- 23)1990年8月に調査を実施した。なお、山東半島先端の漁村については以下において報告したので、合わせて参照されたい。
- 田畠久夫・金丸良子「中国山東半島の漁村(1)～(3)」、地理36、1991、36-3、67～74頁、36-6、75～81頁、36-8、86～92頁。
- 24)70畝の耕地が存在するが、すべて果樹が栽培されている。
- 25)例えば、栄成市（旧栄成県）龍須島鎮西霞口村など。
- 26)中国では職業あるいは居住地（都市）などにより「戸口」（戸籍）が異なる。「漁民戸口」を有していると、毎月食糧の配給が受けられる。配給される穀物の量は一定ではなく、労働の差によって異なっているが、1ヵ月45斤ぐらいの食糧の配給を受けている。同様に都市に居住する「城市戸口」は、威海市などでは1ヵ月に35斤程度の食糧の供給を受けているので、漁民の仕事が激務であることが推測できる。なお、「農民戸口」に関しては、自給自足が建前で、食糧の配給はないが、農業税としての「公糧」の割り当てもない。
- 27)中国では、第110～180漁区と称している漁場である。
- 28)1988年8月に調査した。なお、この他1987年7月にも舟山諸島の漁村を調査したことがある。これらの漁村の概要については以下において報

告した。

田煙久夫・金丸良子「中国の漁村—舟山諸島のフィールドノートから」、地理32-12、1987、117~123頁。

田煙久夫・金丸良子、前掲15)、など。

29) 舟山諸島には他の類型の漁村も存在するが、比較の意味で同類型の漁村を事例としてとりあげた。

30) 塩の生産は年間1500トン(1987年)である。

この他、北馬峙村には730畝の面積をもつ舟山市定海区塩業局が直接管理する塩田も存在する。

31) より正確には、漁船は漁業生産隊の所有ではなく、北馬峙村公所の居民委員会の居民委員会の集団所有である。

32) これらの共同所有漁船は「個人船」と称されている。

## 中 国 漁 村 的 变 迁

—根据山東、浙江兩省調查的比較研究—

田 煙 久 夫

成為一个国家或者一个民族所固有文化基礎的文化、一般被稱為基層文化。基層文化現在不太顯示于表面、要具体地認識牠還是有難度的。因此、在考察日本固有文化時、必定會想到作為基層文化的代表——照葉樹林文化、認為牠對日本固有的形式帶來很大的影響。這里所說的照葉樹林(*Iucidophyllous forest*)、在很多場合被稱為常綠廣葉樹林帶、是以生長在東亞溫帶(粗櫻)(*Quercus glauca*)為代表的植物生長帶。在這片照葉樹林帶中、雖然居住着民族和語言各不相同的團體、但飲茶習慣、用魚鷹捕魚的內河漁業等多種文化及生活樣式又具有共同性。

以上所述富有特色的照葉樹林帶、牠的最東端一直延續到日本群島西南部。氷河時代暫且不說、日本列島因海洋和中國大陸相分離、因此飲茶、魚鷹捕魚等的文化要素、既然在日本列島上不能獨自產生、那麼就認為是從海上傳過來的、即很多照葉樹林帶所有的共同的文化要素、是由中國東部沿岸的漁民傳播到日本列島的、由此看出、居住在山東、浙江省的漁民、非常接近日本列島、所以具體的分析他們的生活變遷、可找出了解日本基層文化的線索。也希望由此對日中文化作出貢獻。另外、還認為山東的漁民是從江南地區經過山東到達日本這一文化傳播線路的、所以把他們作為發表此文的對象。而且、漁民在那里組成和日本相同的村落、以此為基地來開展活動、因此把漁村作為主要研究對象。

中国的漁村、按照筆者的經驗、經營主體規模可劃分如下；

- (1)个人經營——沿岸漁業、內河漁業業為中心；
- (2)单一漁業村——漁業生產隊為中心；
- (3)複數漁業村——漁業生產大隊為中心；
- (4)漁業鄉經營——公司、公社為中心；

作為本文(2)事例、現舉出山東省榮成市石島鎮大魚島村大魚島漁業公司、浙江省舟山市北蟬鄉北馬峙村漁業生產隊、並以生產形態的變遷為中心。